

天からの贈りもの

奨励	大澤 香【おおざわ・かおり】
奨励者紹介	同志社大学神学研究科生 日本キリスト教団洛西教会牧師

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼ら是一群の民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（ババル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

（創世記 11章1―9節）

こんばんは。神学研究科博士後期課程4年目に在籍しております大澤香と申します。この夕方のチャペル・アワーでお話しさせていただくのは今回で2回目です。早5月も終わろうとしていますが、4月に新しく入学された皆さんや、新しい学年に進級された皆さん、それぞれに今どのように過ごしておられるでしょうか。私自身の最近の近況を少しご紹介させていただきますと、現在は博士論文の執筆に追われていると言えますか追いつめられており、正直なところカレンダーを見るのが恐いような心境です。もう5月が終わってしまうのかと思うと、愕然とした気持ちになります。

私は現在、西大路通の近くに住んでおり、大学に来る時にはいつも自転車で近所の北野天満宮の前を通って来ます。菅原道真が学問の神として祀られている神社ですので、受験シーズンにはものすごい人ですし、梅の季節や毎月の縁日など、普段から修学旅行生やたくさんの観光客が訪れている様子を目にします。今の時期に神社の前を通りますと、大きく貼り出されているのが、6月1日の火之御子社例祭（ひのみこしゃれいさい）の案内です。これは通称「雷除け」と言われる、菅原道真を祀る天満宮がおかれる以前から、もともと雷神を祀っていたこの神社の大変古くからある行事とのことです。ある時ラジオを聞いていましたら、この北野天満宮の雷除けのことが取り上げられていて、雷の多い年は豊作であることが多いことから、元来は五穀豊穡が祈願され、また合わせて、落雷の被害が少ないことが願われたとのことでした。そのラジオ番組のなかで面白いことが紹介されていたのですが、そもそも日本語の雷という言葉は、「神が鳴る」というところにその語源があり、古来、雷は神が鳴らすと信じられていたことから来ているとのことでした。また、雷が稲を実らせるという信仰から、「稲妻」や「稲光」という言い方が生まれたということが紹介されていました。

キリスト教の暦

神社の暦から先に紹介してしまいましたが、キリスト教のカレンダーでは今はどのような時期かということ、イエスが十字架で死んで、3日目に復活し、40日間地上で過ごした後、天に上げられ、その10日後に弟子たちに聖霊が与えられたという一連の出来事を記念する時期を過ごしています。イエスの十字架―復活―聖霊降臨というキリスト教の暦は、ユダヤ教の暦の逾越祭―収穫感謝祭（シャブオット）とほぼぴったり重なっています。この一致はもちろん偶然ではありません。そして明後日の木曜日は、復活後に40日間地上で弟子たちと共に過ごしたイエスが、弟子たちが見ている前で、天に上げられたことを記念する「昇天日」に当たります。イエスの昇天の場面は、新約聖書のルカによる福音書の最後と使徒言行録の初めに記されていますが、弟子たちが見ている前でイエスが天に上げられてゆく、という舞台のワンシーンのような場面です。「天に上げられる」という姿を考えてみる時に、それは「その人が地上には属していない」のだということ、「その人の所属は天にある」ということ、を示しているのかもしれませんが。実際、昇天の場面で天に上げられるイエスの姿は、新約聖書が書かれる以前のユダヤ教文学の、神から遣わされた御使い（天使）が、地上での任務を成し遂げて天に帰って行く時の姿と重なることが指摘されています。そしてイエスの昇天後、イエスが約束した聖霊が弟子たちに与えられたことを記念するのが、昇天日から10日後のペンテコステで、今年は6月8日の日曜日に当たります。

「罰」の物語なのか？

さて、今日選ばせていただいた箇所は、旧約聖書のなかでも大変有名な箇所ですので、ご存じの方も多いのではないかと思います。「バベルの塔」と言われる物語で、人々の言葉がバラバラにされて、全世界に人々が散らされたとされる物語です。神が人間の言葉を混乱（ババル）させたという物語の内容と、バベルというこの町の名前が言葉遊びのように掛けられて、バベルという町の名前の語源物語という体裁を、この物語は取っています。

世界中が同じ言葉を使って、同じように話していた時、この土地に住み着いた人々は、高い塔のある町を建て始めます。日干しした煉瓦ではなく、よく焼いた煉瓦を使い、それをアスファルトでしっかりと固めながら、頑丈な塔を急入りに築き上げていきます。「天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言って。

ところが、彼らが急入りに急入りに築き上げていた頑丈な塔は、その途中で、神によって建設を中断させられます。言葉が混乱させられ、互いの言葉を聞くことができなくなり、全世界に散らされる。この物語は、神に反逆した人間への「罰」として、人間の言葉がバラバラにされて、全地に散らされたという、とても明確なテーマをもつ物語として昔も今も読まれてきましたし、実際そのようなテーマをもっているのだとも思います。

ただ、神に反逆する人間への深刻な「罰」の物語としてだけこの物語を読もうとする時に、わたし自身は、それだけでは何かしっくりこない、腑に落ちないものが残る気もするのです。先ほど、この物語はバベルとババルが言葉遊びのように掛けられた、バベルという町の名の語源物語の体裁をとっていると申しましたが、それだけではなくて、この短い物語のなかには、たくさんの言葉遊びが使われています。さっと目につくものだけでも軽く10個以上あります。掛詞という和高尚な感じですが、物語の半分くらいは実は言葉遊び、駄洒落で出来ているのです。

人間の神への反逆という深刻なテーマであるにもかかわらず、しかしさらにその深刻さの上を行くように、この物語のテーマである「言葉」で遊びながら、この物語を「深刻に」読もうとしているわたしたちの思惑にさえも「肩透かし」を食わせる、そんな雰囲気すら感じるので。「神からの罰」ということのみで終わらず、焼いた煉瓦とアスファルトで頑丈に築かれつつあった人間の思惑が、神によって一度バラバラにされ、その間を神の自由な風が軽やかに吹いているような、小気味の良さ、爽やかさ、明るさすら、どこことなく感じる物語であるような気がするのです。

ペンテコステの物語と共に読むと・・・

古くから、このバベルの塔の物語は、新約聖書の使徒言行録2章に記されているペンテコステの物語、弟子たちにイエスが約束された聖霊が与えられた場面と重ねられながら読まれてきた歴史があります。ペンテコステの場面では、激しい風が吹いてくるような音が天から響き、炎のような舌（これは言語という言葉ですが）が分かれ分かれに現れ、一人ひとりの上にとどまった。そして、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、他の国々の言葉で話しました。そこにいた世界中から集まって来ていた人々は、それぞれ自分の故郷の言葉で神の偉大な業が語られているのを聞いた、ということです。使徒言行録には、バベルの塔に対応するような建物としての塔の姿はどこにも描かれていませんが、使徒言行録全体をとおして、弟子たちの口をとおして語られた神の福音の言葉がすべての人々に伝わっていき、神の救いの業を信じる者の共同体、神の教会が建てられていく姿が描かれています。

「言葉」の世界

わたしは、8年前にこの同志社大学の大学院神学研究科の修士課程に入学しまして、それ以来神学の研究を続けておりますが、神学の研究を始める前の学部時代に、言語学の分野で学んでいました。大学に入学した後も、興味がある分野がいろいろとあって、自分が本当に何を勉強したいのかがなかなか定まりませんでしたが、いよいよ何か自分の専攻の一つ選ばなければならないという時期になり、ずいぶん悩んだ末に「言語学」を選びました。選んだ理由は恐ろしく単純で、「言葉について学びたいから」というものでした。そこには、わたし自身のなかに、矛盾するようですが、言葉についての「言葉にならない思い」があったように思います。「言葉」はわたしにとって、とても恐ろしいものであり、同時にとても大切なものであり、そして同時に、とても不思議なものでした。「言語学」を勉強すれば、この「言葉」というものを少しでも理解し、そして捉えることができるのではないかと、心のどこかにそのような思いがあったと思います。

言語学を学び始めて1年目のころに、当時通っていた教会では毎年、聖書講座というものが行われていて、何人かの信徒が与えられた聖書の箇所について準備をして話のですが、牧師から、「君は言語学を学んでいるから、創世記のバベルの箇所について話してくれないか」と言われました。確かに、言語学のこれまでの研究のなかには、世界に何千とある言語の、一番最初の言語は何だったのかを突き止めようとするような、まるでバベルの起源を探索するような研究も行われてきました。でも、そういう意味での知識は学んでいても、わたしには聖書のバベルの物語をどう読めばよいのか、ということが分かりませんでした。それでその年の聖書講座は断ってしまいました。「言葉を理解したい」と思って言語学を選んだのに、理解するどころか、どんどん分からなくなっている、言葉から遠ざかっているのではないかと、何とも言えない気持ちがありました。

勿論、言語学に問題があった訳ではなくて、言葉というものを自分の手のなかに捉えよう、というようなわたしの当初の思いが傲慢であったということだと思いますが、その思惑が崩れ去ったとき、言語学をとおして、わたしはとても素晴らしいものもたくさん教えてもらいました。現在のわたしの研究においても、言語学は大切な一部分となっています。

神の言葉の探究

ただもう少し、言葉の世界を自由に泳いでみたいという思いがあって、神学研究科に進学いたしました。その言葉というのは、人間の話す「言語」であるだけでなく、人間の言葉をとおして語られながらも、地上には属していない、人間の傲慢さや思惑から出るのではない、「天から」やってくるような言葉です。

傲慢な自分には恐ろしい雷鳴のように鳴り響いて、粉々に打ち碎き、同時に、本当の命の光を教えてくれるような言葉。真剣でありつつもユーモアたっぷりで、挫けそうな時には、お腹の底から笑わせ、身も心も軽くしてくれるような言葉。わたしを元気づけ、生きる力を与えてくれる、神の言葉。

放っておけば自分のための塔を築こうとする人間の視点からは、決して出てこない言葉です。自分のために思って語る言葉は、どんなにきれいな言葉を使っても聞き苦しいです。でも、本当に相手のために思って語る言葉、人を生かす言葉は美しい。なかなか、人間の力ではこの言葉を語ることはできません。人間という「性質」のなかからは、このような言葉は出てこないのだと思います。でもきっと、天から吹いてくる神の自由な息吹にわたしたち自身が生かされている時には、わたしたちもまた、このような言葉を互いに語ることができるのではないかと思うのです。互いが互いを生かす言葉です。わたしたちが互いに天からの言葉を語り合っていくことができれば、そこには素晴らしい何か、わたしたちがまだ見たこともないような神が設計される何かが姿を現すのかもしれませんが。

そのような言葉の探求を、これからも続けていきたいと思っています。

2014年5月27日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録